

モダンカンタを世界に発信

パドミジャ・クリシュナム

Padmaja Krishnam



カンタアーティスト、パドミジャ



イギリスのフェスティバル・オブ・キルトのグランプリ受賞作。



リクシャーはなくてはならない乗り物。

コルカタ在住の若手ファッションデザイナー、パドミジャ・クリシュナム。「トランジット」と名付けた小規模な実験的ファッションブランドを二〇〇五年に立ち上げた彼女は、服をはじめ、布や革など自然素材のハンドクラフトを発信している。

パドミジャのもうひとつの顔がキルト作家。ベンガルのカンタのスタイルを借りて独自のアートを表現する彼女は、イギリスのパーミンガムで毎年開催されている「フェスティバル・オブ・キルト」の二〇〇七年度コンテストで、自身初めてのキルトコンテスト応募でありながら、グランプリ賞と部門最優秀賞を獲得した新鋭のアーティストでもある。

コルカタ在住の彼女のアトリエは、市のはずれにあつた。「五つの池がある地」という意味の「パンチヨシカセ」といふ地名



連作作品

「今、最高の腕を持つカンタ職人、五人を抱えています。全員が主婦で、子どもを学校に送り出してからここに來ます。仕事は家に持ち帰らず、この仕事場だけで集中してやつてもらいます」とパドミジャ。デザイナーらしく、とことんひと針のラインと色にこだわり、最高のカンタを職人に要求する。

ファッションデザイナーからスタートしたパドミジャがカンタを取り入れた小物の製品作りやアート作品としての制作を始めた大きな理由は、服の残り布を生かしたいと考えたからだ。本来は捨ててしまう布を集め、新しい作品を作る精神は、ベンガル伝統のカンタ作りに通じるもの。そこに今風のステッチを加えたらあつたかい雰囲気の良い表現が誕生した。

最初、白木綿を生かした伝統のスタイルに従つたが、プリント布にカンタを入れたらおもしろいのではと考えた途端に、扉が開いたように自由な発想ができるようになった。こうして、いろんな素材を使い、現代の絵を刺し子で描く新しいカンタスタイルが確立されていく。

彼女が頑なに守り続けるひとつの決まり事があつた。それは、布を重ねて作るカン

木の生い茂る田園風景、もう一方にビルが林立する市街を見渡すことのできる面白いロケーション。その古いレンガの建物の一室がパドミジャの仕事場。その小さな部屋で、服やクラフトが職人たちの手から生まれている。

おじやました日はカンタの仕事をする女性三人、朝の光の射し込む明るい窓辺で針を進めていた。ここでの仕事は、まずパドミジャがデザインした図案が職人に渡され、それぞれがたつぷりと時間をかけて刺していくというシステム。ここでは、デザイナーと職人が毎日仕事の進み具合をチェックしながら、少しずつ模様や色を足し引きして満足のゆく仕上がりを目指す。急かしたり、仕事の量を増やしたりせず、何日も費やし、進める仕事である。



外は草原。



パドミジャを手伝うホビータライは34歳。
ムドミジャを手伝う。
ムドミライ(左)20歳とルバダー29歳。



マはファッション。



携帯電話を描いたカンタ。

マフガチマ。



ストーリーを描いた。



くキルトである。

「これは『ノクタシカ』と呼ばれているもの。昔、カンタは結婚や出産のお祝いの品として作られ、葬式にも使われたため、厚みのあるしつかり仕立てが多かったんです。今は、一枚布での『ノクタシカ』のほうは作る人が少なくなつて、やり方が忘れられそうです。私が『ノクタシカ』にこだわるのは、一枚布では表せないステッチの質感と陰影です。細かいステッチを保つためには高度の技術が必要で、時間も多くなりますが、私はこのスタイルにこだわります。」

六十人の職人を訓練していますが、たった五人しか仕事をまかせられないという現実があります。でも、妥協せずに根気よく、価値を理解してもらいながら指導していきます。」

昔のカンタのモチーフやサリーのデザインを調査して、ステッチや写真を集め、その意味や歴史的背景を調べ、記録帳を作る作業も進めている。将来、必ず大きな意味を持つであろうそのドキュメントを、作品のデザインの傍らにコツコツ続けながら、そこで得た知識をステッチに応用したり、現代のデザインへの応用を試みている。

「古いスタイルに新しいデザインを加え、私なりのデザインを完成させる。まさに私のブランド名『トランジット』の意味合いを具体化させていきます。」

先祖は、スリランカを祖国とするタミール人。一九四七年の印度パキスタン独立時の東西ベンガル分割により、家族はコルカタに移ってきた。コルカタ生まれのパドミジャだが、家族にカンタをする人はおらず、市場で目にしたときにも興味を抱かなかつた。しかし、ある日、仕事場の床に散らばる白い布の故ちくずを目にしたときに、「カンタ」を思い出したのだという。

三十代の若きアーティストが発信する新しいカンタが楽しみでならない。